

日本アナキズム研究センターとは

- ・ 目的と運営
- ・ 現状とその課題
- ・ 1974年の活動

CIRA-NIPPON

日本アナキズム研究センターは、今からおよそ三年前、一九七〇年の十月に設立の呼かけがなされ、以後多くの協力と支援により建設が進められています。

目 的

研究センターの目的は、「反権力・反国家・絶対自由の思想と運動に関する過去および現在の文献、資料、運動紙誌を収集・整理し、その完全な保存を図るとともに、利用者に広く公開することにある。

この目的のもとに、呼びかけのなされた翌年、一九七一年には有志が研究センター設立のために活動を開始、同年夏に書庫建設を終え、以後七二年、七三年と文献、図書の収集と整理を中心に活動を続けている。

現 状

研究センターの現状は、静岡県富士宮市の龍武一郎氏にある十畳余りの書庫、蔵書は約二千冊の単行本と、ダンボール十数箱分の整理中途のミニコミ、パンフ、雑誌類が足の踏み場もないほどに積まれている。

昨年十二月に、同市内に作業兼宿泊兼閲覧のために分室ができ、作業の円滑化が図られている。しかし、残念ではあるが現在はまだ公開されていない。

研究センターの他の活動としては、昨年七月のセミナー、九月からは通信紙『月刊リベロ』の発行があり、その活動も少しずつではあるが積み重ねられている。

運 営

研究センターの運営は、書庫を管理している龍武一郎氏を中心に、有志十数名ほどが活

動の実質を分担している。運営、活動の体勢は、有志の自主的参加と責任に基づき、月一回の定例の会合を中心に進められている。従って、関心をお持ちの方は何時でも歓迎いたします。

また「センターの趣旨にそった広範かつ長期的な発展のため」に、相談役として、大沢正道、長谷川進、向井孝の各氏に、研究センター管理、運営全般にわたって助言を受けています。

今後の課題

四年目を迎えた研究センターの課題は、まず公開できる体勢をつくっていくこと。それと現在の書庫では近い将来（一〜二年）図書、文献類を収納しきれなくなり、また公開のための物理的条件も現在の建物では不十分であることから、別個に新たな土地と建物を獲得することが必要となっている。これらを含めて今後の課題を列記する。

一、管理体制を整え、センターの実務を円滑に処理できるようにする。

二、センターの公開を早急に検討する。

三、専従の管理者の常駐を含む、財政的基盤を確立する。

四、独立した土地と建物（書庫、閲覧・宿泊設備）の確保を中心とした、長期ないし中期的な計画を作成する。

公開はいくつかの段階を経て達成されることになる。二〜三月に電子リコピーを購入する予定で、まずコピーサービスの体制が早期につくられる。図書、文献類の直接利用は、しばらくの間は制限された形でしか考えられていない。

研究センターのこれまでの経過と、今後の課題のおおまかな紹介を終えたところで、センター四年目の活動、いま何をやろうとしているのかを報告することにしよう。これは昨年十二月、今年の一月と、二回にわたる例会での討議にもとづくものである。

基本作業

一、図書、文献類の整理

二、蔵書目録の作成

三、国際局の設置 外国のアナキスト・グループとの交流は、

これまでほとんど取り組めず、数点の機関紙が送られてくるだけの状態である。恒常的な連絡網の開拓を目指して、体勢づくりを図る。

・外国のアナキスト・グループとその活動に関する情報を集める。

・アピール文の発送。

・資料の交換を図り、あわせてその活用を考える。

地方の運動史発掘の旅

各地に埋もれている運動史を発掘し、あわせて各地の同志に研究センターへの協力を要請する。運動史は、二、三人でチームを組み、地方別に協力者を募りつつ、聞きとりと資料の収集（もしくは複写）を中心

その他

- 一、「年報七三」の発行、アナキズムに関連した一年間の動き、刊行物、論文、その他の活動をまとめる。
- 二、東京、京都に、文庫の可能性を追求する。
- 三、アジアのアナキスト・インタールの可能性を追求する。

『月刊・リベロ』

昨年九月から、センターの通信紙として刊行（於・京都）されていた『リベロ』紙は、京都における新しい編集体勢の成立という動きの中から、研究センターとは独立した情報紙としての途を進むことになった（二月号・通巻一四号より）。従って、センター関係の報告事項は、しばらくの間、同紙の紙面を借りて行う。

『リベロ』特集号

昨年「夏のセミナー報告集」として発行した『リベロ』誌を、隔月で発行していく。

編集方針は、資料・文献の紹介、翻訳、研究の成果（今年度の研究センターのテーマとして、①外国アナキストグループ紹介 ②戦後アナキズム運動史 ③朝鮮人のアナキズム運動の三つがある）を柱としている。

計画予定

- 1 定例会——毎月第二土曜日、於・富士宮の分室。
- 2 春のキャンプ——三月二一日（木）～二四日（日）本棚作成

・図書の整理・ミーティングなど。於・富士宮。

- 3 夏のキャンプ・セミナー——七月二八日（土）～八月五日（日）於富士周辺。内容の具体案は五月までに作成する。

- 4 運動史発掘の旅・その一——六月下旬、北海道（もしくは東北も）を予定しています。

※ 以上、参加希望者はあらかじめその旨を連絡して下さい。

（連絡先・静岡県富士宮市杉田二五一 龍武一郎 気付）

電話・〇五四四二一七―四三―一四）

文献センターについて

龍 武一郎

文献センター・設立と活動の経過及び現在の主旨、今後の具体化案は、『リベロー』七三年夏のセミナー報告集の中で詳細に書かれているので、ここで私がくりかえして書くよりも、そのセミナー報告集をお読み下さい。

文献センターと私の関りあいの起りは、大阪の尾関弘君が奥沢君と話し合ったときに、『文献センター』のことが問題となったことにある。そこには、尾関君の一九六八年のヨーロッパ旅行―スイスのローザンヌのアナキズムの国際図書館(CIRA国際アナキズム研究センター)を訪れ、実際に見てきた実感から日本にもつくることの必要を強く感じたこと などの背景もあって、構想が話し合われ、そしてセンターを具体化する為に私の所が選ばれたのである。

奥沢君の書いている経過の中で、私がかって文献センターを立案したことがあり、というのは少し誤りがあるので訂正しておきたい。

連盟解放の総会が名古屋で開催されたとき、その席上で「山鹿さんが私に僕が死んだら僕の持っている文献やパンフレット、その他のものも、保管、管理してくれと言われていたので」とその話しをした所、その維持管理の大変であるということで反対されたことがあった。「文献センターを立案」とは、多分、そのことを指すのだろう。向井さんがその時僕のものたのむよと、冗談話をされたように思っている。山鹿さんの遺志は、向井さんやその協力者によって山鹿文庫が作られ、実現されたことは喜ぶことばしいことだと考えます。

エスベランチストの伊東三郎氏も、エスベラントのもので自分のあつかっているいろいろなものをあずかって下さいとよく言われたが、建物もなかったで、そのことは実現しなかった。が、その様なことが文献センター案になったことと思われまう。

一九七〇年十月初旬に僕の所に奥沢君が訪ねてこられ、文献センターの設立の協力を言われた。場所としては、建増しの計画で一部室と便所の基礎工事が前年に終っていた場所があったので建てることは可能であった。その一部室と便所の上に書庫兼閲覧室にする構想を奥沢君に話した。

しかし、実際には建設資金や維持管理の面で多くのいろいろな困難があることを指摘したが、奥沢君の態度は誠実な中にもきっぱりとした、やり抜く決意が感じとられたので私も協力しようという気持ちになった。そのことは彼の文献センター設立から活動についてでもいいえる。私の所には毎月一度は必ず訪ねて、建設、打合わせ、文献やパンフカードの整理にあたってきたことを見ても大変な努力家である。

もう一つ、かつて石川三四郎の蔵書を中心に文献センターを作ろうとして出来なかったことがあり、そのことに對して、今度は何んとかやってやろうという氣持があつて、僕を動したのも一つの動機です。

センター設立の呼びかけが尾関君や奥沢君や僕等の個人的な呼びかけで、「作つたから協力を」といった形で出されたこと、に對する批判や反ばつがあつた。奥沢君が戦後のアナキズム文献一覽表を作成する段階で、古い仲間の人達とのいざこざや誤解を生じ、また尾関君や私に對する信頼も全面的でなかつた。

そういうこともあつたので、途中笹本君のきも入りで古い仲間の発起人会ないしは世話人準備会の話し合いを持つことにしたが、若い人達のやろうとする意見一致が進んで、すでに一つ一つの積み重さねの既成事実化を押し近めていくより手はなかつた。

センターの発足後「ばおばふ」グループの協力と大阪からの有志の協力で書庫の建設や、備品や書籍の集積がすすめられた。「ばおばふ」はこれらの活動の主力となり、また東京から運搬等に努力してくれたけれど、意見の相違によつてグループは解散していった。その後は細々とはあるけれども、いろいろな人達の努力によつて、本やその他の資料を少しづつ整理し、また書籍もパンプも集りつつある。

いろいろな人達が来たり、去つたり、文献等の相談よりも、アナキズムそのものへの疑問や、運動のありかたや、個人的な生活の相談等々の事件が起り、その処理などが次ぎつぎ起つてきました。文献センターの主たる業務よりも、その周辺に起きてきた色々な事の方運帯が先行していて、私の管理、運営が進まず、生来怠け

者なので三足のわらじを履いて皆さんに御迷惑をおかけしたことをこの紙面をかりておわびしておきます。

作年より羽熊君や中村君の強力な行動家によつて、曲がりなりにも新しい運営体勢のもとに、基本文献の収集と整理、リベローの月刊発行等が行なわれ、今後の発展を皆んなの努力によつて続けて行きたいと思つています。

センターとの関わり

中村 隆 司

人知れぬうちに、誰かが、いつとはなく来て、各人にできるだけのことを、それぞれの思いをこめてなしてゆく。そしてその事を確認しうるのは、僅かに引き継ぎノートに記された数行と、以前とは異なつた位置にある本だけであつた。

最初、何の氣はなしにやつてきたセンターはそんな不思議な場所であつた。

その頃仕事の関係で三島に居て、地理的に近かつたことと、以前から龍さんを知つていたこと、そしてセンターの資料を利用してはしかつたことなどの要因が重なつて、センターにやつてき

たのがそもその始めである。

山と積まれた書籍に、多少の整理の手伝いはできるかもしれないと思つて手をつけたが、その時は深い意味も、従つて深い関係性もそこに見い出してはいなかった。

センターの諸事務とその本来持つべき機能と自分の関心領域との関わりを見出したのは、古くからそこに関わっていた人々に相遇してからのことであつた。その意味で、僕は良い同志に恵まれたと思つてゐる。

一体に、或る活動と自己が接点を持ち、いささかの関係をきりむすぶ為には、自己の主体の側に客観的な諸条件と共に、過去から引き継がれてきたある思いが宿されていなければならぬまい。その各人の思いが、各人の様々な有り様を基盤としつつ、活動の場で共約項を見出し、そうすることによって、各人もそしてまた活動も高められてゆくのであらう。

そうした意味において、僕には六年来の無政府主義運動の総括といった問題があつた。今はもうないと聞く大学アナ研、二、三の関わりのある組織、と自己史の中でも一つの結節点となるであろうこの時期の内包していた問題を、実践とイデオロギーの立場からはっきりと位置づけておきたい、決してうやむやにはしないぞという確執があつた。

六八年以後、僕は大きな運動の結節点を経てきた。僕らの側から言つてみても、六六年十月のベ反委の先駆的な闘い、背版社の爆発事件、アナ連の解散、ノンセクト・ラディカルの登場――学生アナキストの主体的な参加、ベ平連運動の場、学園闘争の深化、無政府主義に対する期待と反撥、アナキーな情況の醸成、

と幾多の闘いと問題が生起した。そして、革命派は既成の杜共を中心として民主連合政権を方針とする旧左翼と、新しい変革を望む新左翼との二派にはっきりと分裂した。

このような中で、世界を変革する新たな無政府主義の実践と思想の構築が要請されているのは言うまでもない。いたずらに焦ることはないが、各人が各人の主体の立場から、これらの問題に着実に答えてゆかねばならぬまい。

僕はこうした考えに立つて、大きくは、革命史の中の無政府主義運動の意義と問題点、もう少し身近には、戦後の日本史の中の無政府主義運動を学ぶ必要を感じた。

このような作業は学生の頃から遅々としてではあるが続けられていた。就職によつて一時期中断はしたもの、そのことによつて増々焦眉の課題として浮かびあがってきた。

就職は、僕に労働者階級の惨情を再認識させるものであつた。一見豊かな消費と快適な生活をエンジョイしているかにみえる労働者の内実は、屈折した思いに沈んでいた。民主々義も企業の前では立ち停まらざるを得ないようである。企業社会の中には、権力と命令の絶対主義が支配している。しかもそれは、肉体的のみならず精神的にも労働者の屈服を要求しているのである。そんな中で、労働者の独立と自主を唯一守る筈の組合ですらも、企業の第二労務課といった様相を呈してしまつてゐる。労働組合は日常的には、労働者の物質的要求をのみ限定的に取り上げ、しかもたいした熱意をみせずおざなりに処理しようとする。

こんな事実があつた。その当時、活況を呈していた僕らの会社

では、女子事務員の労働が日曜出勤はもちろんのこと、しばしば深夜一時、二時に及ぶこともあった。組合の寄り合いの席上、一番年上の（といっても勤続四年、二十二才の女子事務員だが）女の子が、折から支店巡回できていた本部の組合幹部に意を決したかの如く訴えた。

「私達は、毎晩遅くまで残業を強いられ日曜まで出勤しています。私達の仕事のミスとか能率が悪いとかいうのなら、私達にも我慢のしようがありますが、そうではありません。この活況の為なのです。私達の人数ではとてもこなきれないことは誰にでも明らかです。会社の方は、だから給料もいい筈だとよくおっしゃいますが、私達は余計なお金なんかありません。皆、夜、お花に通う人もいるでしょうし、料理学校にゆく人もいます。たまには喫茶店にいたり、買い物もしたいのです。私達はもっと時間を欲しいんです」

と、最後の方は涙ぐんで訴えた。皆、同情していた。組合の幹部も、それに善処する旨を約束して帰っていった。しかし、事態はいっこうにかかわらず、組合からの連絡もないままだった。活況が終わろうとする頃、一人の女子事務員がやめていった。次に組合の幹部が来た時は、賃上げの組合執行部案を説明する為にであった。

どこの企業でも似たりよったりのことだろうと思うが、労働組合は賃上げとボーナス闘争によって、金で事を解決しようと考えているかのようである。それと、企業内の専制主義には目をつぶって、もっぱら選挙活動に主眼を置き、まるで組合推薦の候補が議会に通れば全てが変わるかのようになっていないのかと

疑われる。しかも組合と会社の癒着ぶりは、目をおおいたくなるばかりである。こうした閉ざれた専制主義の中に取り込まれている労働者の意識が、屈折し深い所でくすぶっていることは当然の事と言えるだろう。僕は新しい労働組合運動の必要性を痛感した。

こんな事情が重なって、僕はセンターとの関係を深めることになった。龍・奥沢両氏の思いもまたこうした点を含めていた。

だが、センターの現状は、こうした思いを充たすためには不十分であることも否めない。しかしながら、日本のどのような研究室、図書館、調査機関にしても、このような思いを充たしてくれる所はない。六八年を前後して盛り上がった大学紛争の一つの問いかけてもある学問の権威主義・資本からの解放の一つの答として、いわば我々の側からの実践的な要請にもとづいた意味をもこのセンターは含んでいると思う。文獻解釈学等や公式資料、歴史の表街道を歩んだ政治主義とは無縁なもの、民衆の絶対自由を求める確かな運動・記録、無政府主義の資料、そうしたものを利用しうる場所としてセンターは存在するのである。不十分な点は、利用者がそれをセンターの活動として実体的に補ってゆけばよい。そうすることによって、初めてセンターは、僕らとの関係を強固にきり結ぶことになるし、またセンターの内容も豊かになると同時に、人知れずなされた個人の営為が、センターを媒介とすることによって、多くの後続の人々の役に立つ。そしてまたセンターを媒介として、各地の人々との結びつきも可能となるだろう。こうして今、僕とセンターの関係は不可分なものとしてある。

紹介・再録

アナキズム研究誌

季刊『無政府主義研究』

同誌編集委員会の編集によるA5版六六頁の雑誌であるその創刊の宣言を次に引用する。(定価三五〇円)

点Vとして位置づけていきたい。

編集委員会

一 発刊にあたって

アナキズムが一つの世界思想としてへ公許Vされて、いくばくかのへ時間性Vを経過している現在、果してアナキズムはアナキズムたりえているか、否。それは、まさにへ公許Vされているが故に、古典性の賛歌から一切抜け出ていないという限定性を持った限りでのアナキズムでしかないといえる。今、私たちが、この研究誌で、あえてアナキズムと関っていくとする行為は、そういったドグマ化されたアナキズムではなく、われわれが存在している現在の共同性II場の否定II反否定との確執から引き出されうるだろうアナキズムの可能性を追究していくことである。そして、それを、本誌におけるへ課題Vとして、またへ出立

この文章を読んでちよとした感想をつけ加えたくなった。読んだ最初の印象は、仮に、二年でも三年でも前であったなら、多分新鮮さとする力強さを読む者に感じさせたかも知れないということであった。ということは、七〇年代の当初において、すでに現状認識として踏まえ、自らの課題の設定とその模索として提起されたものが、二、三年の空白の後にボツリと持ち出されたからである。これが、最初に感じたへ古さVへ遅れVといった感想の背景である。しかし、それらの問題が公において討論され、共通のテーマとして意識されたことはなかったように思う。その意味において、創刊の辞が今後どのように発展をみせるかは、興味深いところである。

(0)

目次

国家の崩壊	片岡 啓治
無吉なる思想	衛 紀生
無政府主義論	志摩 弘
組織論へ	藤本 正
権藤成郷論	久保 隆

『性とアナキズム』

小川正夫評論集

六〇〇円(送料共)

名古屋市昭和区小坂町二一六

小川正夫遺稿集刊行会

リベロー 一号

一夏のセミナー報告集 一五〇円

土方コミュニケーション 〃もたろう建設

はぐまなおよび

富士地区一般産業合同労組

一その歴史と闘い

非暴力直接行動

小さな総括

非暴力直接行動の訓練

研究センター・設立とその経過

WR I

山鹿文庫について

べらぼうなぐるうぶ

山鹿泰治の生涯

外国のアナキストグループ

ブルードン 一その現実主義

奥沢 邦成	戸駒 恒世	向井 孝	春木 富三	奥沢 邦成
中村 隆司	高橋三喜子	奥沢 邦成	奥沢 邦成	奥沢 邦成

大杉事件・橘少年の墓

『朝日新聞』四八年二月二十六日より

五十年前、関東大震災の混乱のさなかに無政府主義者大杉栄夫妻が幼い「橘宗一」少年（当時六才）とともに憲兵に惨殺された事件は、「大日本帝国」の暗い裏面を象徴する事件として近代史に刻まれているが、名古屋市内の寺にひっそりと建つ宗一少年の墓が近い将来、無縁仏として消えるおそれがあるという。このため婦人有権者同盟常任委員近藤真柄さんら、三人にゆかりのある人たちの間で「軍閥の暴虐に対する怒りと告発のしるしともいふべきこの墓がなくなるのはしのびない」保存の声が高まっている。

宗一少年の墓があるのは名古屋市中種区の覚王山日泰寺。事件のあと、父親橘惣三郎氏が大正末年に建てたものという。

近藤真柄さんの話によると、大杉栄、野枝夫妻の墓は静岡市にあり、宗一少年の骨も一緒に埋められている。また、野枝の郷里福岡県糸島郡今宿村（現在福岡市）にも

三人の分骨が埋葬されており、親類や知人の手で慰霊行事も行われてきた。

しかし、少年のこの墓のことはほとんど知られておらず、母親あやめさんが昭和の初め、次りで父親惣三郎も太平洋戦争前死んだあとはずっと半ば草に埋もれた状態だったらしい。たまたま昨年八月、名古屋市内に住む同有権者同盟の会員が日泰寺の墓地でこのお墓を見つけた。そのことを朝日新聞の「ひととき」欄（名古屋版）に投稿したのがきっかけで世間に知られるようになり、訪れる人も出てきた。

この墓には「宗一八：犬共ニ殺サル」と明確に記されており、愛児を奪われた父親の切々たる心情をうたった短歌も刻まれている。静岡の墓がただ大杉栄とだけ記され、福岡の墓も世間をはばかって無記名であるのとは対照的だ。「静岡と福岡の墓所だけからだ、軍閥による殺の事実は出てこない。それだけに、父親が勇気をふるって一人抵抗したあとがしのばれる」と近藤さんはいう。

ところが、このほど宗一少年のアメリカ時代の先生であった熱海市田原本町、坂井はま江さん（八〇）がおまいりに行った際

寺務所で縁者からまったく音さたがないので、いずれ無縁仏として取り扱うことになりそうと聞き、驚いて近藤さんに伝えてきた。（中略）

この宗一少年の墓碑は、表に英語で、一九一七年米・ポートランド市に生まれた、とあり、その下に「吾人はすべからず愛に生くべし、愛は碑なればなり。橘宗一」と彫られている。裏には上段に「宗一ハ東京大震災ノサイ、大杉栄、野枝ト共ニ犬共ニ殺サル」とあり、下段に「なでし子を夜半の嵐にた折られてあやめもわかぬものとなりけり 橘惣三郎」と父親の短歌が書かれている。

近藤真柄さんの話 橘家の遠縁はおられるようだが、承継の行われていないのはどんな事情があるのか、くわしいことはわからない。あまりさしがましくなっても、と思っているが、軍国主義への抵抗のしるしとして、なんとか残したい。同じような気持ちの人も少なくないので、どうすればいいか、みなさんとよく話し合ってみたい。